

Title	第46回岐阜外科集談会
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1968), 37(3): 461-464
Issue Date	1968-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/207465
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

第 46 回 岐 阜 外 科 集 談 会

日時：昭和42年9月6日午後6時より

場所：岐阜大医学部丹羽講堂

1. 教室における Malignant Lymphoma の統計的観察

第二外科

○渡辺尚・坂井昇・三輪勝

過去10年間に我々の教室で経験した Malignant Lymphoma について集計を行なつた所、全生検数216例に対し、26例(12%)の本疾患を得た。26例を組織学的に分類すると、1) Lympho-sarcoma 6例(♂4, ♀2), 2) Reticulo-sarcoma 8例(♂7, ♀1), 3) 1), 2) の混合型3例(♂2, ♀1), 4) Hodgkin 病5例(♂4, ♀1), 5) Lymphatic leucemia 3例(♂2, ♀1), 6) 不明1例(♂1)であつた。遠隔成績について追求しえた16例について集計すると、胃に限局して発生した Reticulo-sarcoma 1例の2年3ヵ月生存例と、診断後2ヵ月の Hodgkin 病1例以外はすべて1年又はそれ以内に死亡している。これらの症例に対し若干の統計的観察を行なうと共に、本疾患についての他の統計と対比検討した。

2. 陳旧性手舟状骨々折の一手術経験

松波病院整形外科

太 田 吾 朗

21才の男子、作業中330ポンドの木箱が上方からずり落ちそうになり、受けとめた際、右手関節痛を来したが、放置し4ヵ月半後初めて本院を受診した。その間日常動作には殆ど支障なく野球、卓球、ボーリング等とやつていたが、手関節を良く使つた後には腫脹疼痛が増強していたという。レ線上方舟状骨中央部の横骨折で中枢骨片には壊死様変化と囊腫様変化が認められ、Snuff-Box より竹穿孔後自家骨釘移植術を行なつた。ギプス固定は肘関節上部より行ない手術は固定せず早期より自動運動を行なわせた。4ヵ月後骨梁の一部が連絡し固定を除去し手関節運動を開始したが、5ヵ月後骨折部は完全に癒合し、手関節様縫合正常に治癒していた。手術により確実な固定をうるなら早期よ

り運動を行なつてもよい結果を得るのではないかと考える。

3. 食道癌の放射線治療

県立岐阜病院放射線

奥 孝 行

岐大 放射線

木 村 完

岐大 二病理

下 川 邦 泰

過去3年間に岐阜病院で11例の食道癌患者の放射線治療を行なつた。胸部食道又は噴門部の癌であるが組織像の明らかなもの9例は全例、扁平上皮癌であり残りの2例は胸部食道癌であるため胃に原発した噴門癌はない。1例を除き腫瘍の長さはフィルム上6cmから18cmに及び、所謂末期癌であつた。照射は ^{60}Co の外照射とRaの腔内照射とを併用し病巣線量6000R以上を目標とした。照射後に手術を施行したものは3例であり、その中2例は手術死であつた。手術死のもの、および現在生存中のものも含めて全例の平均生存月数は6.4ヵ月である。若干の文献的考察を加え、2, 3の症例を提示した。

4. 脊髄蜘蛛膜炎手術例の検討

岐医第二外科

田中 千凱・○坂井 昇

過去8年間当教室で入院加療を行なつた脊髄蜘蛛膜炎患者は23才から76才に互る15例であつた。椎弓切除術を受けて蜘蛛膜炎の存在が確認された患者は9例、残りの6例はパンピング及び薬物療法にて治療された。手術群の9例はミエログラムで強いマイオジールの通過障害が観察されたもので、これを除くことによつて退院時及び遠隔成績に症状がかなり軽快したもの8例で、この内に2例は嚢腫性蜘蛛膜炎を含み、その回復は著しかつた。

非手術群の大部分はミエログラムで通過障害の軽度

なものであり、上記の治療方法では期待した程の効果は挙げ得なかつた。

5. 乳児脊髄腫瘍の1例

岐大第2外科

広瀬 旭・上田 茂夫

乳児脊髄腫瘍はきわめて稀で、本邦においても10例にみたない。われわれは第11胸椎から第5腰椎におよぶ硬膜外神経鞘腫の1例を経験した。症例は生後4ヵ月の女児、生後3ヵ月頃両下肢の筋力低下、運動障害を初発症状とし発症、直腸膀胱障害、臍部以下の知覚脱失を併なうようになり入院、腰椎穿刺にてフロアン現象陽性、後頭下穿刺によるミエログラフィーで診断確定し、充実性の腫瘍を全摘した。術後両下肢の自動運動は次第に活発となり、順調に経過している。本症例に文献の考察を加え報告した。

6. ファロー氏四徴症の一手術例

岐大第一外科

安藤 充晴・渡辺 裕

症例は2才10ヵ月の男児

出生時よりチアノーゼが著明で、少し動くと hypoxiatic spells におそわれるようになり来院した。合併奇形として、右胸鎖乳突筋の發育不全、椎体發育不全による胸椎側彎症腰椎過多、左第I～V肋軟骨の癒合、両側外ソ径ヘルニア、左腎の發育不全があつた。肺スキャンニングにて、左胸廓の強度の変形のため、左右肺にかなりの差が認められ術後肺機能を考慮して、左鎖骨下動脈と左肺動脈とに Blalock の吻合術を行なつた例で、6ヵ月の現在、Htは減少しチアノーゼは軽快している。

7. 人工弁移植の1例について

国立療養所日野荘外科

清水 慶彦・加藤 康夫
井上 律子・小林 君美

我々は最近、僧帽弁狭窄兼閉鎖不全症の27才の女子に、人工弁移植術を行ない、良好な結果を得ているので報告する。

主訴：動悸、息切れ

現病歴：昭和39年11月に風邪をひいて、動悸、息切れ、浮腫をきたした。翌年11月にも同様症状をきた

し、僧帽弁狭窄兼閉鎖不全症と診断された。昭和41年2月15日に非直視下で交連切開術を行なつた。この際、弁口の狭窄と閉鎖不全を確認し、弁口を開大すると逆流が増すのを認めている。

術前所見：心尖部で収縮期及び拡張期の強い雑音を聞き、心電図で心房細動はない。胸部X線写真で、左房、右房及び右室の拡張と肺紋理の増強が認められる。

昭和42年5月26日に人工弁移植術を行なつた。人工弁は、Kay-Shileyの8号を用いた。血流の完全遮断時間は46分10秒である。

術後は極めて順調に経過し、術後4ヵ月の現在、自覚症は全く消失している。

8. 人工腎臓使用に関する知見

岐大第一外科

島 津 栄 一

われわれは、最近、慢性腎不全の16才の男子に、Kolffのdisposable twin coilを使用し、3～4日目ごとに6回血液透析を行ない、2～3の知見を得たので報告した。

左橈骨動脈と、左橈側皮静脈との間に作つた permanent A-V shunt は18日間に感染、凝血を見なかつた。

灌流液は McLean の処方に従つたが、これを溶かす時 CaCO_3 の白濁を生ずる場合があるが、これを防ぐには、他の薬剤を溶かし pH の補正を行なつた後、 CaCl_2 を少量の湯に溶かして加えると良い様である。

患者血清と灌流液との滲透圧の差は 50mos/l 位が浮腫を除去するには適当である。

この例では、NPN138mg/dl となると嗜眠状態となり痙攣を来したため、NPN120mg/dl 以上になれば透析が必要であつた。

9. 最近の腎結核の症例

岐阜市民病院泌尿器科

尾 関 信 彦

最近経験した腎結核の数症例について、その臨床像、経過等について述べ検討した。併わせて当病院における過去3年間の腎結核の統計的事項について報告した。

10. 最近5年間の教室における腎腫瘍の統計的観察について

岐大泌尿器科

磯貝 和 俊

昭和37年から昭和41年の5年間の腎腫瘍の患者は腎実質癌8例、腎盂癌6例であつた。上記14例について性別、年代別、治療法および予後について述べた。

11. 特発性総胆管拡張症の一治験例

関ヶ原病院外科

国枝 篤郎・○山田慎一郎

我々は最近特発性総胆管拡張症の1治験例を経験しましたので報告します。

症例：21才、女性

主訴：右季肋部疼痛

本年3月頃より、右季肋部痛、発熱、全身倦怠感強く、6月初旬、胆石症の診断下に開腹術を行なつた。

胆のうはやや緊満しているが、胆石を認めず、総胆管に起鰐卵大の囊腫様拡張をみとめた。Papilla Vateriの部に通過障害はなく、胆管十二指腸側々吻合術を行ない、術後26日目に全治退院した。

この特発性総胆管拡張症について若干の文献的考察を行なつた。

12. 短絡的側々吻合部に発生せる

小腸潰瘍の一例

大垣市民病院外科

森 直之・蜂須賀喜多男・富安 信

加藤量平・○石川覚也・村瀬充也

田本栄司

症例は38才の男性で、腹部外傷による回腸穿孔症のため短絡的側々吻合術を受けた。

以後頑固の腹痛に悩み、約7ヵ月後当院に入院した。悪心嘔吐を伴わない腹痛で常時右下腹部に著明な圧痛があり、消化管透視で通過障害、盲嚢形成は認められなかつた。

吻合病、或は異物を疑つて開腹術を施行して見ると小腸の広範囲な癒着と吻合部に潰瘍を認めた。潰瘍部を含め吻合部を切除し端々吻合を施行した。組織学的には非特異性回腸潰瘍であつた。

本症例は小腸潰瘍を発生させる積極的な原因がな

く、潰瘍が吻合部に隣接しており、吻合部自体は異常がなかつた事より、吻合病の特異な一型と考えられる。

13. 脳神経細胞の大網播種転移を伴なつた卵巣奇形腫の1例

羽島病院

河村雄一・関野昌宏・国藤三郎

患者は腹部膨隆を主訴とした13才女子で、卵巣囊腫の疑いで手術を行なつたところ、淡赤色の腹水を約3.8l認め、左卵巣より発生した成人頭大2.8kgの多房性囊腫状の部分と充実性部分とを有する奇形腫であつた。大網には粟粒大白色半透明の小結節を多数認めた。奇形腫を全剔出し、大網の一部を切除した。組織学的には三胚葉性の構造が全て認められる奇形腫で、量的に多いのは脳神経組織で大網の結節は脳神経組織の播種性転移であつた。術後9ヵ月再発の徴候全く認めず、健康である。本例は1946年 Proskauer が自己の1例と文献上の10例について報告しているように奇形腫摘出後、神経膠の播種転移が退行変性していつたものと考えられる稀な例である。

14. 直腸壁子宮内膜症の一例

岐阜市民病院外科

○安 江 幸 洋

直腸壁子宮内膜症は比較的稀で特に直腸癌との鑑別が困難である。我々は最近月経時の腰痛、下腹痛及び不妊を主訴とする41才の患者に癒着性子宮後屈症の診断にて婦人科で開腹されたところ、子宮及び付属器は外見上正常であつたが子宮後面は直腸と硬固に癒着しており悪性腫瘍の浸潤を思わせる如く硬く直腸壁の一部に鳩卵大弾性硬の腫瘤を触知したため直腸癌を考え子宮及び付属器を含め直腸の切断術を施行し組織学的検査で子宮内膜症であつた症例を経験したので報告する。

15. 痔裂の臨床的観察

岐大第一外科

稲垣 英 知

昭和40年1月から2年間の痔裂の外來患者120名の統計的・臨床的観察についての。患者は男58人、女62人で、0～10才台を除けば男女同数であつた。年

令別では20才台が最も多く、次いで30才台でこれらの
年齢層で全体の65%を占めた。症状自覚から初診まで
の期間は約半数が1ヵ月以内であつた。初発症状は疼
痛と出血が57%で、次いで出血25%、疼痛18%。初診
時の症状としては出血が88%、疼痛80%、硬結は男16
%、女5%。Sentinel Pile は男女とも16%であつた。
肥大肛門乳頭は男女とも10%、痔核は男33%、女21

%, 肛門周囲膿瘍は3.3%, 痔瘻2%, 肛門掻痒症は
75%であつた。排便については、男21%, 女42%に便
秘, 男女とも17%に硬便傾向を, 下痢は男女とも3%
に認めた。痔裂の存在部位としては男87%, 女70%が
肛門の後半分に認めた。治療は入院例では内肛門括約
筋切断が最も多い。